

# 大人数授業において個別学習を実現する授業内多読の実践

鬼田 崇作

広島大学外国語教育研究センター

## 1. はじめに

本稿は、筆者が平成24年度前期に担当したコミュニケーション IB 授業における授業内多読活動についての実践報告である<sup>1)</sup>。コミュニケーション IB の授業は、一クラスの人数が50人程度となる、比較的人数の多い授業である。クラス内の履修者数が多くなると、学生の個人差も多様となることから、一斉授業を行うと同時に、可能な限り個人の興味関心や学習速度に合うように授業を計画する必要がある。そこで筆者は、本授業において個別学習を促進する一手段として、授業内の多読活動を用いた。本稿は、その授業内多読活動の結果について、授業履修者の学期を通じた読解速度（Words Per Minutes 以後 WPM）の変化と、学期末に実施した授業内多読活動に関するアンケート結果について報告を行う。

## 2. コミュニケーション IB 授業の位置づけ

広島大学では、学士課程における英語教育改革の一環として、学生の英語力の向上を目指し、平成23年度より、約半数の主専攻プログラムにおいて、教養教育における英語必修単位を6単位から8単位へ増加した。平成23年度より、英語必修科目が8単位されたプログラムの学生は、以下の表1のように授業を履修することとなった。

表1 広島大学の教養教育における英語授業と単位数（鬼田，2012，p.161）

学期	授業科目	単位数
1年次 前期	コミュニケーション IA（スピーキング中心）	1単位
	コミュニケーション IB（リーディング中心）	1単位
	コミュニケーション基礎 I（語彙，文法中心：新規開設）	1単位
1年次 後期	コミュニケーション IIA（ライティング中心）	1単位
	コミュニケーション IIB（リスニング中心）	1単位
	コミュニケーション基礎 II（語彙，文法中心：新規開設）	1単位
2年次 各期	コミュニケーション IIIA（発表技能中心）	1単位
	コミュニケーション IIIB（理解技能中心）	1単位
	コミュニケーション IIIC（特色ある「ことば」の教育：新規開設）	1単位

注：2年次は各期1科目，1単位を選択

表1に示すとおり、コミュニケーション IB の授業は、通常、1年次前期に履修する授業であり、英語リーディングが中心である。また、クラス編成においては、1年次における発表技能中心のクラスと理解技能中心のクラスの連携をはかるため、コミュニケーション IB、コミュニケーション IIB の理解技能の1クラスを2分割することでコミュニケーション IA、コミュニケーション IIA のクラスとする方法を採用した。このことから、コミュニケーション IB は50名程度が履修

する大人数のクラスとなり、一斉指導とともに、学生個々の個性に応じた個別学習を促進することが必要であった。

### 3. コミュニケーション IB における授業実践の概要

#### 3.1. 担当授業における学生の英語習熟度

筆者が担当したコミュニケーション IB においては、学生の所属学部によってブロックが分けられており、筆者は (1) 工学部、(2) 医学部・歯学部・薬学部 (以後、医・歯・薬学部)、(3) 教育学部の3クラスを担当した。コミュニケーション IB のクラスは、入学時に学生から自己申告される大学入試センター試験の英語得点をもとに、習熟度別クラスが編成される。筆者担当の各クラスの学生が大学へ入学した直後である5月時点に受けた TOEIC IP テストの結果は表2のとおりである。

表2 各クラスの5月時点における TOEIC IP テストの結果

	最小値	最大値	平均値	標準偏差
工学部 ( $n = 56$ )	280	690	475.09	83.31
医・歯・薬学部 ( $n = 50$ )	350	870	701.40	98.40
教育学部 ( $n = 44$ )	225	630	479.32	73.95

表2に示すとおり、工学部、教育学部の平均値は共に470点台であり、中程度の習熟度のクラスであるが、医・歯・薬学部の平均値は700点を超えており、比較的習熟度の高いクラスであった。

#### 3.2. 使用教科書の概略

本授業で使用した教科書は、英宝社から出版されている『*Power-up Practice for the TOEIC Test—Living and Working in North America—*』であり、これは、コミュニケーション IB の授業において教員間で統一されている。本教科書は全16ユニットから成り、各ユニットは、以下のような構成である。

- (1) Dialogue (当該ユニットのトピックに関する会話文とそれに関する正誤問題)
- (2) Word Match (当該ユニットのトピックに関する語句とその定義)
- (3) Collocation (当該ユニットのトピックに関する重要語のコロケーションの確認)
- (4) Listening Comprehension (当該ユニットのトピックに関するリスニング問題)
- (5) Grammar (4択式の文法問題)
- (6) Reading Comprehension (TOEIC テストの Part 6, 7に似せた読解問題)
- (7) Writing to Learn (単語の並び替えなどの和文英作問題)
- (8) Further Study (当該ユニットのトピックに関連するプラスアルファの課題)

本授業では、上記 (1) と (4) のリスニング問題および (7)、(8) 以外の部分については予習をしておくことを前提とし、授業内では問題の答え合わせと解説を中心とした。

### 3.3. セメスターの計画

全15回の授業の計画は表3のとおりであった。

表3 セメスターにおける授業計画

授業内容	
第1回	授業概要の説明および英語実力診断テスト
第2回	単語テスト (a01, a02) 教科書 Unit 1 WPMの測定
第3回	単語テスト (a03, a04) 教科書 Unit 2
第4回	単語テスト (a05, a06)
第5回	第1回小テスト (単語 a01-a06, b01-b03, 教科書 Unit 1-2)
第6回	単語テスト (a07, a08) 教科書 Unit 3
第7回	単語テスト (a09, a10) 教科書 Unit 4
第8回	単語テスト (a11, a12) 教科書 Unit 5
第9回	単語テスト (a13, a14)
第10回	第2回小テスト (単語 a07-a14, b04-b06, 教科書 Unit 3-5)
第11回	単語テスト (a15, a16) 教科書 Unit 6
第12回	単語テスト (a17, a18) 教科書 Unit 7
第13回	単語テスト (a19, a20) 教科書 Unit 9
第14回	TOEIC IP テスト
第15回	英語実力診断テスト, 教科書の残り
第16回	第3回小テスト (単語 a15-a20, b07-b10, 教科書 Unit 6-9), WPMの測定

注：教科書の Unit 8は、まとめユニットであるため、授業内では扱わなかった。単語テストの a, b は標準リスト (a) と発展リスト (b) を指し、a のリストは b のリストよりも易しい単語で構成される。単語テストの01などの数字は単語リストのチャプターを指し、1チャプターは100単語で構成される。

表3に示すとおり、本授業では、3から4週に1回の間隔で小テストを行った。小テストの問題は、その前週までに授業内で扱った教科書と単語テストの範囲から出題した。また、授業内多読活動による読解速度 (WPM) の変化を明らかにするため、第2回授業と第16回授業 (第3回小テスト後) において WPM の測定を行った。

### 3.4. 授業の構成

#### 3.4.1. 多読以外の活動

通常授業では、授業の開始時に単語テストを行った。また教科書に関しては、教科書の構成の通りに授業を進めた。上述の通り、本授業では教科書の内容について授業前に予習を行うことを前提としたため、授業内では語彙、文法、読解などの問題についての答え合わせと解説を中心とした。また、予習の範囲として指定していないリスニング問題に関しては、授業内で問題に取り組み、その答え合わせを行った。

#### 3.4.2. 多読活動の概要

授業内では、教科書に関する内容が90分の授業時間の3分の2程度を占め、残り時間の20分か

ら30分程度を多読活動の時間とした。また、第5回および第10回授業では、教科書の内容に基づく小テストを実施し、その後、多読活動を行った。この場合も多読活動の時間は20分から30分程度であった。

多読に用いた材料は、受講者の習熟度を勘案し、Penguin Readers のレベル 2, 3, 4 の Graded Readers を用いた。受講者に対しては、(1) 自分の興味、関心に合う本を選ぶこと、(2) 本の内容が面白くない、あるいは難易度が自分の英語力と合致しない場合、すぐに別の本に変えること、(3) 辞書の使用は控えること、(4) 毎授業後、読んだ範囲の内容を記録すること、(5) 1冊読み終われば、その本の面白さについての評価を5段階で行い、本の概略と感想文を書くこと、の5点を求めた。

### 3.4. 成績評価

コミュニケーション IB 授業の成績評価は、次の図1に示すとおり、通常授業での取り組みおよび TOEIC IP テストの結果をもとになされる。

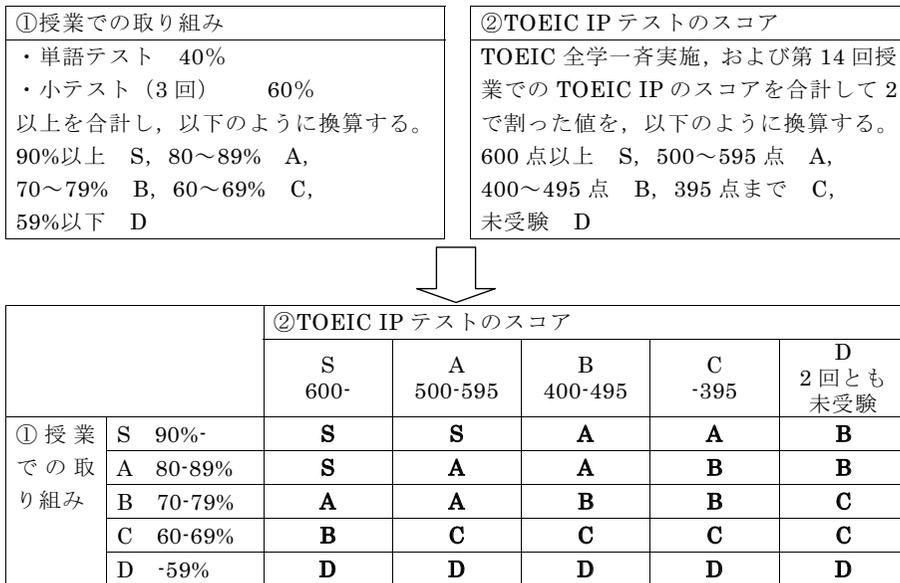


図1 コミュニケーション IB 授業における成績評価の方法

このように、本授業の成績評価においては、多読活動は関連がない。しかし、大人数授業で一斉指導に加えて個人の興味関心に合う学習を行えること、また、英語力を養成する上で必要となる多量のインプットを得られるという観点から授業内多読活動を行った。

## 4. 実践の結果

### 4.1. 読解速度 (WPM) の変化

ここでは、授業内多読活動の結果について、学生の読解速度の変化を示す。表3に示すとおり、本授業では、第2回授業と第16回授業（第3回小テスト時）に WPM を測定した。WPM の測定

に使用するテキストは、ジャパンタイムズの英語学習サイトである週間 ST オンライン (<http://www.japantimes.co.jp/shukan-st/>) のエッセーから Let's go to the movies! (2012年 Mar 2 のバックナンバー) と What's the most difficult language? (2011年 Mar 4 のバックナンバー) の 2 種類の読解テキストを用いた。WPM の測定においては、読解テキストを MS Word ファイルで学生の PC 画面に提示し、筆者が 1 分を測った。1 分後、学生が読解できたところまでの単語数を MS Word の文字カウント機能を用いて計測した。この手続きを 2 種類の読解テキスト毎に行った。第 2 回授業時と第 16 回授業時の WPM の結果を表 4 に示す<sup>2)</sup>。

表 4 第 2 回授業時と第 16 回授業時における WPM の変化

	第 2 回授業時	第 16 回授業時	WPM の差	相関係数 (r)
	平均値 (標準偏差)	平均値 (標準偏差)		
工学部 ( $n = 51$ )	132.34 (29.52)	156.99 (31.83)	24.65	.72
医・歯・薬学部 ( $n = 50$ )	166.84 (39.89)	203.14 (51.17)	36.30	.81
教育学部 ( $n = 43$ )	143.60 (32.53)	172.60 (32.99)	29.00	.67

また、各学部群における第 2 回授業時と第 16 回授業時の WPM の散布図を次の図 2 から図 4 に示す。横軸が第 2 回授業時の WPM、縦軸が第 16 回授業時の WPM である。対角線よりも上は第 2 回授業時より第 16 回授業時の WPM が増えていることを示し、逆に、対角線よりも下は WPM が減っていることを示す。

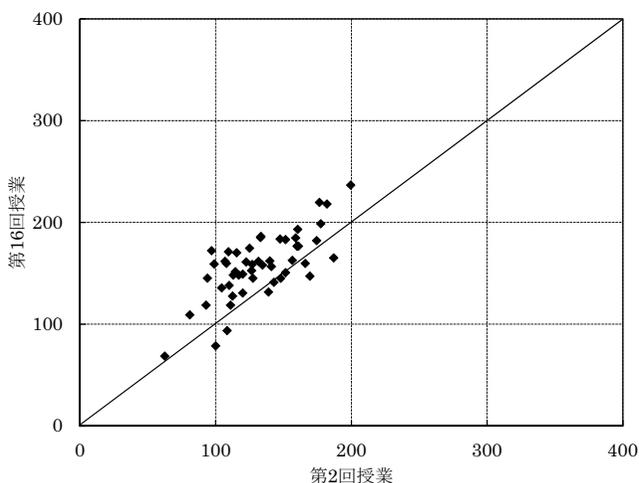


図 2 工学部の第 2 回授業時と第 16 回授業時における WPM の散布図

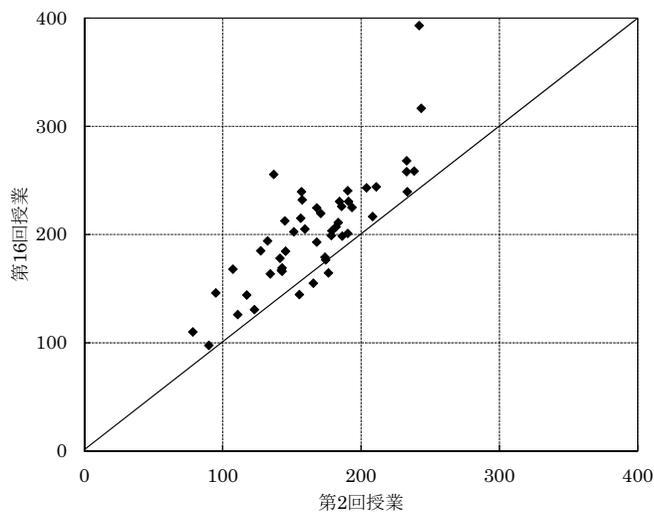


図3 医・歯・薬学部第2回授業時と第16回授業時におけるWPMの散布図

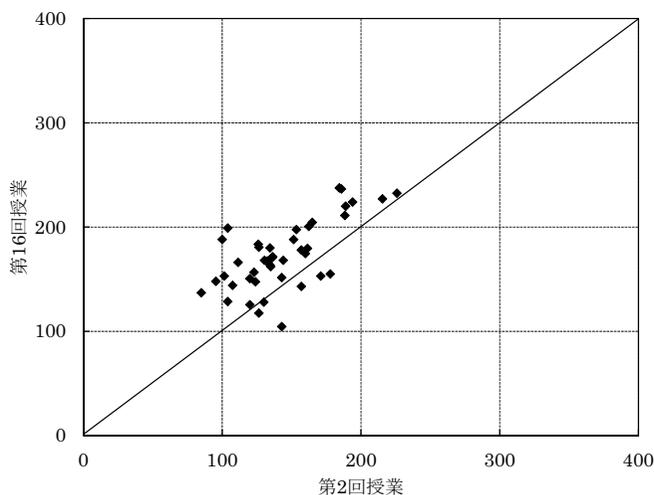


図4 教育学部第2回授業時と第16回授業時におけるWPMの散布図

表4および図2, 3, 4が示すとおり, 第2回授業時から第16回授業時までに, どの学部群においても, WPMが増えていることがわかる。この第2回授業時と第16回授業におけるWPMの変化について, 工学部, 医・歯・薬学部, 教育学部のそれぞれで対応のある $t$ 検定を行った。その結果, 工学部に関しては,  $t(50) = 7.70, p < .01, r = .74$ , 医・歯・薬学部に関しては,  $t(49) = 8.46, p < .01, r = .77$ , 教育学部に関しては,  $t(42) = 7.17, p < .01, r = .74$ となり, 全て有意であった。

## 4.2. 多読活動についての自由記述アンケートの結果

本実践では、WPM測定に加え、授業内多読活動に対して、受講者がどのような態度を有しているかを確認するため、第16回授業時に多読活動についての自由記述アンケートを行った。質問項目は、(1) 授業内で行った多読活動について、良かった点を自由に記述してください、(2) 授業内で行った多読活動について、改善して欲しい点を自由に記述してください、の2項目であった。以下に、良かった点と改善点の自由記述の結果を示す。自由記述の回答は、KH Coder version 2を用いて、良かった点と改善点についての分析を分けて行った<sup>3)</sup>。良かった点についての自由記述の総語数は3,729語、異なり語数は446語であった。

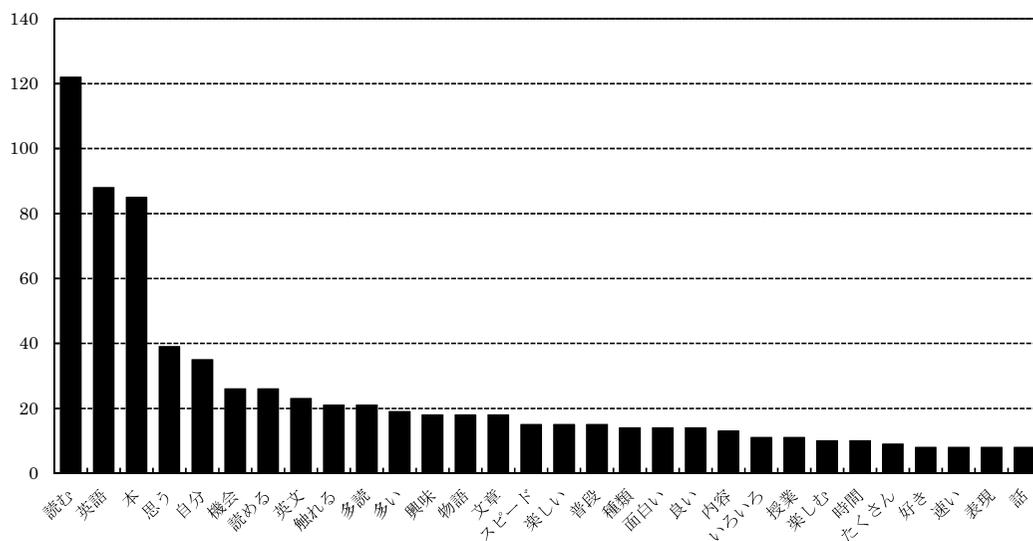


図5 授業内多読活動の良かった点についての自由記述回答に見られた上位30語の度数分布

図5の結果からは、頻度の高い語が「読む」、「英語」、「本」、「思う」などであり、授業内で継続して多読活動を行うことにより、受講者が英語を読めるように感じていることが窺える。これらの語がどのように共起するのかを分析するため、KH Coderに含まれる共起ネットワークの作成機能を利用して、ネットワーク図を描いた(図6)。

ネットワーク図では、共起する頻度が高い語同士ほど近くに配置される。例えば、図6の左側では[理解—以前—速い](実際の回答例:英語を読むスピードが以前より速くなっていった。内容を理解しながらでも今までと比べると十分なスピードになっていてよかったと思う。)などの共起が確認でき、この共起からは、継続した授業内多読活動により、受講生が英文を理解しながら読むスピードが速くなっていった様子が窺える。また、図の下部にある[いろいろ—種類—多い]や[ジャンル—非常—様々](実際の回答例:様々な種類、ジャンルの本があったのが良いと思いました。／選べる読み物の種類が多かったことはよかったと思いました。飽きずに自分の興味のある本を選ぶことができました。)などの共起から、学期を通した多読活動においても、様々な多読教材を準備することにより、受講生が飽きることなく活動に取り組めたことがわかる。この点は、先に述べた、(1) 自分の興味、関心に合う本を選ぶこと、(2) 本の内容が面白くない、





図の右上部には「時間—長い」（実際の回答例：長い時間のときは、ただらと読んでしまったので、時間を意識できるように時間を計測したり工夫があれば、さらに効率が良かったと思います。）などの共起が見られ、多読活動の時間が長い場合、受講生の集中力が続かなくなる様子が見て取れる。また、図の中央には、「最初—行—眠たい」（実際の回答例：途中眠たくなることがあったので、授業の始めのテストの後にやったら集中力を持続させたまま読むことができると思う。）などの共起が見られた。これは、90分授業のうち、60分程度教科書を用いた授業を行ったのち、多読活動を始めるという授業計画であったため、先の例と同様に、受講生の集中力が途切れがちであったことを示すものと思われる。最後に、図の左下にある「書く—感想」（実際の回答例：改善というよりも、感想を書く必要性を感じなかった。）などの共起からは、多読終了後、当該の本の感想を書いて提出することについて、受講生が負担に感じていた可能性が考えられる。本実践では、受講生が自らの読書過程を振り返り、また、多読を阻害しない程度に読書以外の活動を入れることを目的として、毎授業の読書記録と1冊読了後の感想文を書くことを受講生に求めた。しかし、これらの点について、受講生が負担に感じていたとするならば、次回以降の実践においては、改善が必要な点であると考えられる。

## 5. おわりに

本稿では、筆者が平成24年度前期に担当したコミュニケーションIB授業において導入した授業内多読活動の効果について、受講生のWPMの変化と授業内多読活動に対する自由記述アンケートをもとに分析を行った。実践の結果、受講生のWPMは増加し、授業内多読活動の効果が示された。また、自由記述アンケートの結果からは、受講生が授業内多読活動について、ある程度肯定的な評価を下していることも明らかになった。しかし、自由記述アンケートからは、多読活動の最中に受講者の集中力が維持されにくかったり、読後の感想文を書く活動が受講者の負担になったりするなど、授業内多読活動に対するいくつかの課題も見つけられた。今後、授業内多読活動においては、ペアになり口頭でテキストの要約や感想を伝え合うなどの活動を導入することにより、受講者の集中力を維持しつつ負担を軽減する工夫を行う必要がある。

## 注

- 1) 本稿の執筆においては、広島大学の「挑戦し行動する人材育成プロジェクトの推進」事業の支援を受けた。
- 2) WPMの分析には、第2回授業時と第16回授業時の両方でWPMの測定を行った者のみを対象とした。
- 3) KH Coderは、<http://khc.sourceforge.net/> からダウンロードすることができる。

## 参考文献

鬼田崇作 (2012). 「英語スピーキング技能の伸長を主目的とするコミュニケーションIAにおける実践」『広島外国語教育研究』15, 161-173.

## ABSTRACT

### **In-Class Extensive Reading Activity to Assist Self-Paced Learning in a Large Class-Size Environment**

Shusaku KIDA

Institute for Foreign Language Research and Education

Hiroshima University

The purpose of this paper is to show the effects an extensive reading activity had in assisting students in a self-paced learning, large class-size English environment. As the student body was diverse, encompassing varying levels of ability, learning styles, interests and proficiency, it is essential that teachers pay attention to these differences and adapt the materials to each learner's individual differences. However, it is difficult for a teacher to satisfy all of their individual students' learning requirements, particularly in large-sized classes. In order to help bridge this gap, the author introduced an extensive reading activity in a large sized English reading class in order to improve the student's self-paced learning.

The effect of the extensive reading activity was assessed by analysing the change in students' reading speed. This was done by assessing any improvement in students' reading ability when measured by how many words were read per minute (WPM). This was accompanied by a questionnaire which asked students to provide feedback indicating positive aspects of the reading activity as well as any areas that could be improved on.

The results of the WPM analysis showed that students' reading speed did increase between the beginning and the end of the semester. The results of the questionnaire also showed that students had generally positive attitudes towards the reading activity. However, the questionnaire also indicated that some students struggled to keep their concentration whilst completing the reading activities. This is clearly an area for further improvement.